

赫
い
落
雁

く
体
験
版
く

「炭治郎さん！今日も裸で寝てたそうですね！全く、風邪をひいたらどうするんですか！」

神崎アオイの吊り上がった眼が、布団を被って顔を半分だけ出して赤らめる炭治郎を射抜いている。

「ご、ごめん・・・俺は身体の体温が高くて・・・」

「関係ありません！全く、こんなに寝相が悪い人は初めてです！」

そう言い捨てる、アオイは踵を返して部屋を出て行った。

昨夜の妄念に包まれながら、炭治郎はそのまま疲れ果てて全裸で眠っていたらしい。最初に見つけたのは蝶屋敷の病人を介抱する例の三人娘たちだったようだ。自分の無様な姿を見られたのはかなり恥ずかしいが、見られたのが彼女たちで良かったと思う。

しのぶにもし見られていたら、炭治郎の身体中のうっ血の正体に気づき、どんな質問攻めをされるだろう。そう思うといたたまれなくなって首に羞恥の熱があがってくる。

一晚煩悶して眠りについたせいか、目が覚めた炭治郎の身体は再び正常に戻り、衣服を整えて布団を被ると、再び眠気が襲ってきた。

(今寝ると、夜眠れなくなる・・・)

窓の外から清廉な雨の匂いと音が伝わってくる。この雨に、自分の要らぬ感覚も流されればいいのに、などと思いつながら、炭治郎はウトウトと眠りに誘われようとする。

「炭治郎お——！またこの薬だよ！もうなんで一日に五回も飲まなきゃいけないの！？めちやくちやマズいんだよ！朝イチで目エ覚めるわ！」

隣のベッドで寝ている善逸がけたたましい声で泣き言を口にする。

自分に訴えられても、治療のためだからどうしようもない。炭治郎は半分眠りに落ちながら、善逸にとりあえず声をかける。

「飲まないで治らないぞ・・・治る方法があるだけ、ありがたいと・・・思わないと・・・」

「あれ？ちよつと寝ちやうの？俺がこれから苦行を受けるつてのに、見届けもしないで酷くない？ほんと不味いんだよコレ！一瞬甘いけれど、次に渋みが来てどうしたいのかわからない臭みが来る！」

そう言うと、善逸は布団に埋まった炭治郎の手を引つ張り出し、その手を握り締めてきた。

よほどこの薬が不味いのか、飲むときは必ず炭治郎の手を握ってくる。蜘蛛にされかけて小さくなったその手は幼子のように、炭治郎にかつていた弟を思い起こさせる。

「大丈夫だ善逸、昨日も飲めたんだ、今日もちゃんと飲む」

長男心がくすぐられて庇護欲が湧き、炭治郎は手を握り返して善逸の金色の目を見つめる。

ずっと涙目で嬌声を上げて嫌がっていた善逸だったが、そうすると割合大人しく薬を飲み始める。もちろん、飲み終わるまでゲゲエを繰り返すのは無様だが。

「うう、なんで俺ばかりこんな目に・・・」

飲み終わった湯飲みをベッド横にある机に置きながら、鼻をすすっている。

子供のように泣いて、人目憚らず文句を叫ぶ善逸が可笑しくて、本当に男らしくないという思いもあり、若干羨ましくもあった。

(俺は長男だから、なんでも乗り越えないといけない・・・)

泣き言など言っていない、と決意しながらも、昨夜の自分はまた熱に動かされて衣服を脱いでしまった。情けない。しかもそのまま眠ってしまったって裸を見られるとは、不覚以外の何物でもない。

(しっかりしろ、炭治郎！)

自分を鼓舞するが、目をつぶると腰の奥に再びドロリとした欲が広がり、炭治郎は布団の中で膝を抱えて丸くなった。

一体いつになったらこの感覚から解放されるのだろう。

特に血の匂いを嗅ぐと身体の芯が熱くなり、思考がぼんやりしてくるのを自制できない。

今日も人が運ばれてきたのだろうか、血の臭いを昨日より濃く感じて、炭治郎は鼻を押さえて布団に頭まで潜り込んだ。

「あれ、炭治郎寝ちゃうの？もー、外は雨で鬱陶しいし、全く憂鬱な気分になるよー！」

善逸の嘆きを聞きながら、睡魔は嫌でも襲ってくる。炭治郎はそのまま闇に落ち、昨日苦しんだ分を清算するかのように寝息を立て始めた。

（中略）

突然謝られ、炭治郎は驚いた。まさか義勇から謝罪を受けるとは思わず、その大きな目をさらに見開いて相手を凝視してしまう。

「い、いえ、そんな・・・富岡さんが謝ることじゃないです、俺に付き合わせてしまったと思って・・・」

炭治郎はなんだか涙が出そうだった。それを堪えて、必死に声を振り絞る。

「こちらこそ謝りたいと思っていたところでした・・・」

尻すぼみになってゆく炭治郎の声が堂内の空気に落ち、重苦しい雰囲気は二人の間に流れてしまう。

（どうしよう、どうしよう）

俯いて、正座した膝がしらを見つめ、唇を引き結んで炭治郎は義勇の言葉をひたすら待つ。

「……誰が命じたのかは依然調査中だ。判明したらお前にも知らせるし、その隊士にも懲罰を受けてもらう」

「は、はい」

すっかり萎縮してしまった炭治郎には少ない言葉しか出ない。

「お前が受けた蟬丸の置ききは、長く使われていなかった。そして、目的の隊士を潰すために仕組まれた懲罰らしい。一度受ければその影響は計り知れず、最悪、隊士として動けなくなるという記述があった」
記述、ということとは、富岡がそこまでして自分に気を払って、書物を調べてくれたということだ。炭治郎はますます申し訳ない気持ちになる。

「胡蝶と一緒に調べたんだが、これぐらいしかわからなかった。身体に及ぼす影響がどこまで続くのか、どうやったら治るのか、全く謎だ」

淡々としやべる義勇だったが、その話の中にとんでもない名前が入っていたことに、炭治郎は身を乗り出してしまふ。

「えっ？しのぶさん？」

ということは、自分が、あの男として屈辱的で恥ずべき仕置きを受けたことを、しのぶが知っていることになる。柱とはいえ、女性に自分が受けた懲罰の内容を知られるなど、まさに穴があつたら入りたい。

「胡蝶も心当たりのある葉を探してみると言っていたが、あまり期待するなと言われた。それより胡蝶に持ち掛けられたことだが・・・炭治郎、こつちに来い」

呼びつけられて、炭治郎は正座を崩して一尺（30センチ）ほどの距離に寄って正座する。

（ちよつと近かったかもしれない）

緊張してつい振り切ってしまったが、炭治郎は恐縮するばかりだ。しかし、義勇も正座を解いて、さらに炭治郎に詰め寄ってくる。

（ち、近いです・・・）

端正な顔が炭治郎に迫り、その手が額に押し当てられる。

「お前本当に熱はないのか？」

「えっ・・・あ、本当です・・・」

体調不良の熱はない。しかし、義勇に触れたことで、額で感じる感触に、背徳的な熱が背筋を駆け昇ってくる。

胸が高鳴る炭治郎の腰に義勇の腕が回され、そのまま抱きすくめられてしまった。

(ええ・・・??)

訳が分からず炭治郎はただ戸惑うだけだが、人の体温と義勇の香りに包まれて身体がさらに熱く反応してしまう。ベッドの上であれほど乞うた温もりを突き付けられ、当惑と共に情欲が再びせり上がってくる。いけない、と反射的に離れようとして、首元に顔を埋められ、唇を付けられた。

「わっ!」

ぞく、と腰が砕けそうな妖しい感覚を受けて、炭治郎は大きな声を出してしまう。しかし義勇の腕は炭治郎をしつかりと抱き止め、耳元で囁いてくる。

「これから抱く」

「えっ……」

「そういうことになった」

理解が追いつかない炭治郎を置いて、状況は進んでゆく。炭治郎はそのまま義勇に押し倒され、板張りの床へ仰向けに転がされる。

全くの予想外の展開に、床に後頭部が当たるのを配慮せず、強かに打ち付けて鈍い音を堂に響かせた。

「いっ……!」

「すまない」

すぐに義勇は炭治郎が打ち付けた後頭部に手を添え、さらに上へのしかかってくる。義勇の顔が近づいて見えなくなっただと思つた時には、唇に熱くて柔らかい感触があつた。

「——んんっ」

口づけをされたことを理解して、炭治郎はひどく焦るが、そのまま粘質を帯びた舌が口腔に滑り込み、自分の舌に絡められた瞬間、脳天にまで甘い痺れが走り、身体中から力が抜けた。

「んっ、んん、んっ・・・ふ、うっ・・・」

一度口を離され、今度は角度を変えて何度も繰り返し口づけをされる。

「あの仕置きはひどく尾を引く。俺の身体を貸してやるから、熱を吐き出せ」

（身体を貸すって・・・）

立て続けの理解が追い付かない展開だったが、思考より先に、身体がそれを理解した。これまで抑えていた痠熱が一気に甦り、義勇へ向ける淫欲が一気に花開く。

炭治郎の両腕が義勇の身体を抱き締め、その温かさをもっと肌で感じたいと切望し、抑えていた、悩ましい気な吐息が、再び唇から零れてしまう。

ほとんど引きちぎられるようにして療養着のボタンをはずされ、上半身を裸にされると、義勇の広く硬い大人の男の掌が、鋭敏な肌を彷徨い始める。

「あぁっ・・・」

この三日間待ちわびた、蕩けるような快感に、炭治郎の口から例の女のような艶声が零れる。しかし今の炭治郎にはそれを羞恥に思う余裕がなく、ただ義勇から与えられる掌による上半身の愛撫に耽溺してしまう。首筋に何度も唇を落され、身体の疼熱が暴走してしまう。

「んっ！んんっ！あぁぁ・・・っはぁ、あぁぁ・・・っ」

すでに色欲に染められた炭治郎の声と身体が義勇を求めて、全身の肌の神経が集中して、触れられる快感に向けられる。体中にぞくぞくと耐え難い甘い痺れが走り回り、ベッドの上で煩悶していたときは比べ物にならない悦が、炭治郎の身体に沁み込んでゆく。

「はあ、はあ、と、富岡さ……」

「義勇だ。義勇で良い」

切羽詰まった声で迫られ、炭治郎の頭は曖昧になってしてしまふ。自分が義勇に強請ることはあっても、義勇から求められることなどあろうはずがないと思っていた炭治郎は、泣きたいほどの多幸感を感じて大人しく義勇にされるがままになった。

ズボンを簡単に脱がされて、外気に晒された下半身に、板張りの床の冷えた感触が伝わってくる。

下履きもほどかれ、最初に身体に触れられてから、手桶に水が溜まる速度より早く、炭治郎は早くに全裸にさせられていた。

再び身体の上に覆い被さられ、身体が密着して義勇の体温が伝わってくる。義勇らしくなくせわしない様子で炭治郎の顔や首元に何度も口づけして、首筋へ舌を這わせ、鎖骨に降りて、すでに硬くなっている桜色にかかった。

「んっ……！そこは、だめです……！」

とつさに義勇の頭に手を添えて抵抗の意を示すが、構わず先端を固くした舌で円を描くように舐め回され、首元に泣きたいほどの欲情がせり上がってくる。

炭治郎の左肩の上で床に手をつけて身体を支え、義勇は口で上半身を愛撫しながら、空いた手で外気に晒された炭治郎の雛先に手を当てた。

「あぁっ・・・！」

義勇の熱い手が触れた瞬間、腰がどろどろに蕩けそうな愉悦が訪れ、思わず腰を痙攣させてしまう。自分でもはしたないと思いつつ、身体の反応が一切止められない。

そのまま上下にゆっくりと摩擦され、次々と打ち込まれる蕩けるような愉悦に、炭治郎の唇からはひっきりなしに、熱い吐息と嬌声が混じる。

「ふぁ、ああああぁっ・・・！だ、だめです、義勇さん・・・俺、もうっ・・・！」

胸を愛撫されながらの雛先への刺激に耐えられない。体中に快楽の痺れが何筋も這い回り、炭治郎はほとんど理性を奪われて乱れ、義勇の肩に縋っていた。

この三日間恋焦がれた性の刺激に、若い炭治郎の身体は面白いほどに艶なる反応を返してくる。

心なしか義勇の吐息も熱く、そう感じる自分に倒錯的な感情を覚えて、炭治郎はどんどん淫欲の沼にはまってゆく。

「んんっ！ああ、も、もう、だめっ……！」

義勇に出会う前から情欲に囚われ、濡らしていた雛先を良いように扱かれ、一気に吐精感が込み上げてくる。

「熱を吐き出せ、そのまま……」

耳元で恥ずかしい許しを得て、炭治郎は万感の思いを込めて思い切り下半身の熱を吐き出した。

「ああっ！ああああああっ……！」

広げられた両足の足指が内側に窄まり、腰を震わせて、あれだけ渴望した絶頂を迎える。

その快感は筆舌に尽くし難く、ただ炭治郎の頭を真っ白にし、身体が腰から溶けて行きそうな陶酔に満ちた愉悦だった。

それが終わると炭治郎の意識は急に暗くなり、身体中を覆っていた筋肉の緊張が一気にほぐれたかと思うと、そのまま意識は闇に堕ちた。

炭治郎が意識を回復すると、唇に熱く柔らかいものが当てられているのに気づいた。

接吻だ、とすぐに理解したが、意識が半覚醒しながらの唇が気持ちよく、炭治郎の身体は起きてすぐ興奮状態になる。それに、下半身に違和感があったが、その感覚の正体を知覚すると、身体は一層熱くなった。

「っ……っ……！」

炭治郎が目を開くと、片足は義勇の肩に掛けられ、開脚された両足の、双丘の間に義勇の長い指が挿入されている。

「あっ……っ……！」

中を同じ調子で何度も抽挿され、出し入れのどちらでも涎が出そうな快楽が走る。炭治郎が気を失っている間に潤滑油でも用意したのか、義勇の指が挿入されるのに苦痛はなく、むしろヒリつく激感だけを与えられて腰の奥が痺れっぱなしだ。

（中略）

また自分の喉から女のような声が次々と吐き出されるが、それを羞恥に思うほどの余裕はない。次々と悦楽の波が押し寄せ、身体中が熱くて、皮膚の内側が熱で蕩けて零れそうだった。

縋るものが無いので炭治郎の両手は義勇の半纏を掴み、強く握り締めて破れそうだったが、それを咎められることもなく、義勇は炭治郎の好きにさせている。

赤銅色の髪にポタポタと水滴が落ち、それが義勇の流した汗だと知って、その匂いにも炭治郎は発情を深めてしまう。

この三日間ずっと欲しくてたまらなかつた感覚をようやく与えられ、炭治郎の若い身体は何度も達悦を迎え、身体に触れてくる義勇の指から快感を注がれるかのように、性的な興奮が抑えられない。

「はあ、はあ、あああつ……ぎゅ……う……さん……！」

自分を抱く男の名を呼び、半纏越しに腕をとらえて力を籠めると、逞しい成人した男の腕が感じられる。顔を上げると一瞬自分を見下ろす義勇と目が合ったが、薄暗い堂の中で、頼りない蠟燭の赤い光に映された美男の陰影に、胸が一瞬高鳴ってしまふ。

(義勇さんは本当に綺麗な顔をしている)

伶俐な目元に筆で引いたような鼻梁があり、その整った顔を絶妙な輪郭が支えている。

快楽に溺れて乱れる自分の顔を見て、義勇はどう思うのだろうか。女のような声を叫び続け、歯を食いしばり、子供のように泣く自分はどうな無様に映っているだろう。

胸が締め付けられるような感覚が起こり、喉元に感情がせり上がってきて、炭治郎は自分の瞳から涙が零れるのを感じた。

義勇の感情を読み取りたかったが、涙で詰まった鼻では、周囲に立ち込める体液の臭いすら知覚することができない。

義勇の身体がさらに深く覆い被さり、炭治郎の唇を角度を変えて何度も舐めてくる。それがくすぐったくも気持ちよくて、口腔に舌を挿れられて吸われれば、頭の芯が痺れて何も考えられなくなってしまう。

義勇の動きがさらに激しくなり、炭治郎の身体がガクガクと揺さぶられ、淫らな水音と肌がぶつかり合う音が耳を打つ。

ここまで身体を穿たれ乱され、炭治郎は何も考えられなくなっていた。ただ、一方的に与えられる快楽に耽溺するだけで、義勇の動きに応えられているのかと杞憂を感じる隙も無く、ただ連続で襲ってくる絶頂感に炭治郎は淫らな声を上げ続ける。

「あつ、あつ！ああつ、あつ！あああ！はあ、はあ、んんっ！んああつ！あつ、も、もう、あああつ！かはっ……！んぐっ、んんんっ！」

これ以上はないと思われた深くにまで一気に突き込まれ、目の前で白い火花が散る。

「ああああ……っ」

腰の奥からとんでもなく熱い愉悦が込み上げてきて、そこから身体がどろどろに蕩かされそんな感覚を覚えながら、最奥に熱い液体が注がれるのを知覚し、炭治郎は意識を落としそうになった。

「んっ、うっ……はああ……」

万感を込めた愉悦の吐息が漏れ、義勇が満足したのだとぼんやりと把握しながら、炭治郎は胎の中に注がれた熱を感じていた。

「はあ、はあ、はあ、はああ……」

ようやくこれまで堪えていた疼熱を解放され、炭治郎の身体は充足感に満ちていた。

気を失いそうな意識をぼんやり感じながら、炭治郎は首を力なく傾けて床板に預ける。火照った肌には冷たい床が気持ちよく、性の快感とは違う愉悦のため息をついてしまう。

(また義勇さんに、助けられてしまった)

まともに思考できるまで意識が回復したとき、感じたのは義勇への申し訳なさだった。義勇は自分の身体を使えと言ってきたが、本当に使ってしまう自分の身の浅ましさを未熟だと悔しく思う。

「んんっ・・・」

終わった後だというのに、義勇がさらに炭治郎の首筋に舌を這わせ、熱い口づけを何度も施してくる。おかげで身体を這い回っていた疼痛がおさまったようだ。義勇への感謝と、自分の不甲斐なさを痛感する。義勇は炭治郎の顔や首筋に口づけを続け、手で上半身を撫で回し始める。

「ぎ、義勇さん・・・？」

長い指が胸の桜色に当たり、背筋に甘い痺れが走る。

妖者たちの手によってより鋭敏にされた屈辱の性感帯で、こんな場所で感じるなんて男子として恥ずべきだ。しかし義勇の指は追い詰めるように桜色を指で撫で回し続け、上半身から首の後ろまで駆け上ってくる情欲にとうとう声が出てしまう。

「んっ・・・んんっ・・・はあ、あっああ・・・っ」

炭治郎の肌が震え、義勇に縫った手の力が強くなる。義勇の指が桜色を掴み、親指の腹で先端を撫で回され、唐突に訪れた快楽に炭治郎はさらに熱い声を上げてしまう。

「ああっ！あっ・・・ぐっ・・・んんっ・・・！」

義勇に上から覆い被さられ、逃げられない。唯一義勇の腕にかけている手に力を籠めることで反抗の意を示したが、鍛えられた義勇の腕はびくともしない。

「ここが感じるのか？」

そう言われて、炭治郎の身体に例えようのない羞恥が走った。尊敬している兄弟子に自分へ植え付けられた恥を勘ぐられ、一番知ってほしくない相手に気づかれたことで、消え入りたいほどの激しい羞恥が込み上げる。

「あっ・・・んっ・・・うう・・・」

嘘が下手な炭治郎は否定も肯定もできず、義勇の指にされるがまま、桜色を弄ばれる。爪の先で連続して跳ねられ、抓まれてそのまま指の腹で揉みしだかれる。

「っ！ううっ！あっ、やめ、だめ、ああああっ！」

「どんな感じだ？続けるとどうなる？」

無感情な義勇の声が降り注ぐが、炭治郎は情欲に流されながらも義勇の匂いをかぎ取っていた。

（少し怒ってる・・・）

こんな無様な身体を見せられ、蔑まれているのだろうか。しかし、言えば余計に怒らせてしまうかもしれないが、黙っていても怒りの匂いは消えない。

「つ、続けられたら・・・高まって、それで終わります・・・」

消え入りそうな声を出す炭治郎に美形の顔をさらに近づけ、義勇が耳元で言う。

「それは達しているのか？」

ずっと弄ばれている胸の快感と、耳元で吐息混じりに囁かれるぞくぞくする感覚に、炭治郎が苦悶するよ
うな表情で首を仰げ反らせる。

「わ、わかりませ・・・あっ・・・」

中で精を出されても挿入され続けていた義勇の渾身が大きくなり、再び炭治郎の内壁を圧迫してくる。腰
の奥にある快樂の芯を響かせる感覚も伴って、炭治郎は耐え難い快感に両足で義勇の身体を強く挟む。

「あぐっ・・・ううっ・・・!」

そのまま耳を舐め回され、首筋に甘い痺れを感じ、両手が震えてしまう。身体中のあちこちを痺れさせる快感に、熱い吐息と嬌声が止まらない。

すると覆い被さっていた義勇が炭治郎から離れ、腰を掴むと、再びゆっくりと挿入を始めた。

「あっ！ああっ！あっ！や、も、ぎゅ……さん、もう……っ」

達したばかりで鋭敏になっている内を渾身で摩擦され、耐えられない堪らない激感に、炭治郎の身体が震える。

再び炭治郎を上下に揺さぶり始め、義勇は自らの快感に没頭し始めたようだが、再び身体の上に覆い被さって、今度は胸の桜色に口を付ける。

ぞくん、と甘い感覚が訪れて口元が緩んでしまう。義勇の熱い舌を感じた瞬間、泣きたいほどの快感がせり上がり、炭治郎は息を詰まらせた。

「ふあっ、あ、あっ！あっ！あああっ！だ、だめっ……動きながらっ、そこ、触るのはっ……！」

しかし義勇は炭治郎の訴えを聞かず、むしろ桜色を固くした舌先で跳ね回し、口で覆い被さって強く吸引する。

「ううっ・・・うっ・・・あっああああ・・・っ！」

胸の快感が一気にせり上がり、快楽が昇るのが止まらない。下半身で感じる愉悦も相まって、全身の肌が敏感になっていた。

(い、いけない、くる、来てる・・・)

胸に快感が極まる予感を覚え、炭治郎はそれを止めるために必死で快感の走っていない手足を意識して快感を散らそうとするが、自分の中を穿つ激感のせいで思考を巡らせることができない。

「はあ、はあ、もっ・・・だ、だめ・・・っ！」

熱い吐息を零しながら義勇の頭に手を添えると、歯で桜色を食まれ、一気に快感が爆発する。

「んんんっ！んん—————！」

胸へ一気に激悦がせり上がり、炭治郎は背筋を激しく仰け反らせて快楽の電流を浴びたように身体を緊張させる。しかし義勇の口は離れることなく、桜色を食まれたまま舌先で先端を激しく舐められ、極まった快感がいつまでもたつても降りてこない。

「うううっ・・・！あ、あっ、だ、だめっ・・・もう、やめ・・・ずっと・・・あああああっ・・・！」

上半身で快楽を極め、義勇の愛撫が続く間ずっと降りることができず、散々喘がされてようやく口を離されて、炭治郎は激悦から解放された。

（中略）

「あああつ！うあつ！あああ……！」

雛先の先端から勢いよく白液が吐き出され、炭治郎の胸元を濡らす。これほど勢いのついた射精ならば、相当の快感を味わったはずだ。炭治郎は早くもハアハアと息を乱して、いつもは日の光を反射させる瞳に涙を溜めて半分瞼を閉じている。

「ふふふ、ほんとうに可愛い……水柱が執心するのも頷けるなあ」

「これまでにこちらの方は使ったのかえ？」

炭治郎の両足の膝裏を押し、臀部を突き出すような格好にさせられ、羞恥で炭治郎が叫ぶ。

「やめろ、こんなことするなんて、おかしいぞお前たち！」

「おかしい？おかしいのは、我らは命じられたままの仕置きを行ったと言うのに、片輪にされたという事実だ。この恨み、すぐにでもお前を殺めて水柱の嘆く様を見物したいほどだ」

「っ、義勇さんは、俺が殺されても嘆いたりしない……！」

「それはお前だけが思っていることじゃ。水柱は、きつとおまえを穢されて、怒り心頭……くくく、その頃には、わしらはもうおらんがな……」

その笑い声にゾっとしながら、秘孔に指が突き挿れられる感覚を感じ、炭治郎は思わず声を上げる。

「あぐっ……！うう……っ！」

昼にそこを使われたとはいえ、再び燃え上がってきた情欲のせいで、中で淫らを感じてしまう。

「おやおや柔らかい……まったく悪い子だねえ……一体何人誘惑したのかな？」

「くっ、下種っ……！」

しかし指一本挿入されただけで炭治郎の腰は小刻みに震えてしまっている。妖者の指は長く細く、そのまま内壁をかき乱すように激しく挿し始め、炭治郎を艶やかに鳴らした。

「あっ！あっ！ああっ！あっ！や、あっ！やめ、ああっ！」

ずぶりと引き抜かれた指は濡れていて、それを見て妖者が嗤った。

「ううっ……」

「たったこれだけで気をやるか？全く我らの術の効果には感心する……」

「もともと素質のある小僧だったのかもな……我らが初めてではなかったし。全く罪深い小僧だ……水柱も、とんだ稚児をかかえたものよな」

（弟子と言えっ……！）

口を開けば艶息が出そうで、炭治郎はすでに反論する言葉さえ封じられてしまっている。

それにしても、危害を加えられない義勇を苦しめるために、親しい者を狙っていたぶろうとは、なんと卑怯で下種なやり方だろうか。こんな者たちにはいいようにされてしまっている自分の無力が情けない。

「それでは始めようか・・・」

「そうだな、そろそろ・・・」

二度連続で快楽を極めさせられたと言うのに、まだ始まっていなかったのか、と戦慄する炭治郎を置いて、妖者たちが炭治郎の肌の上に濃厚な香りのする液体を塗り始めた。

「なっ・・・うっ・・・!!」

その冷たさにゾクつとするが、体温になじむとすぐに熱を孕んでくる。妖者の使う妙な力を持つ薬液の効果は、前に凌辱されたときに嫌と言うほど味わっている。炭治郎は必死に逃げようと唯一動かせる胴体を暴れさせるが、いたずらに薬液が肌に広がるだけだった。

ヌルついた謎の液体を体中に塗り込められ、その気持ち悪さに炭治郎は耐える。

性の痠熱に蝕まれた身体中を妖者の手が這い回り、何もされなくとも十分感じる身体になっている炭治郎の肌に、この仕打ちは辛かった。

「んんっ・・・！んぐっ・・・やめ、はあ、はあ、はあ・・・」

妖者の手が肌の上を這い回るたびにゾクゾクと快感が走り、身体中のあちこちを痙攣させる若い肌を見て、陰の者たちが楽しそうに嗤う。

「まだ下ごしらえもすんでおらぬというのに、はしたない小僧だ・・・簡単に堕ちて、我らを落胆させるでないぞ？」

大きく広げられた両足の間に、身体中に塗っているものとは違う、べっとりとした粘質を含んだ膜を塗りたくられ、炭治郎は驚愕して腰を暴れさせた。

「なっ！何してるんだ！」

しかし妖者たちにすぐ腰を取り押さえられ、ふんだんに粘液を塗り込まれてしまう。雑先や会陰、陰囊や秘孔に及ぶ、両足の間の一線全てが粘液で淫らに濡れている。

「ここは特別じゃ。あとで新しい快楽を調育してやろう・・・」

得体の知れない妖者の嗤い声にぞっとしながら、炭治郎は周囲を強い光で睨み続けていた。

「本当に零れそうなほど大きな眼・・・赤みがかかって、まるで天の光のようだ」

「我らの嫌う日輪じゃ。封じてしまおう」

「なに・・・あつ・・・！」

布で目隠しをされ、闇に包まれてしまう。視覚を塞がれた分、身体の神経が鋭敏になってしまい、自分の身体が想像よりも妖者の薬液で興奮してしまっているのを感じた。

（こんなものに負けるか、挫けるな・・・！）

そう自分を叱咤するが、身体を覆う淫欲は我慢できないほどに膨れ上がり、肌は誰かに触れてほしくてたまらないほど昂ってしまっている。

気を向けてしまうと、妙な粘液を塗された両足の間がひどく熱い。その上、妙な感覚がある。

(痒い・・・?)

一度そう認識してしまうと、それ以外考えられない。妖者たちは、性感帯の固まった場所に媚薬を塗るだけでなく、痒さを引き起こす凶悪な薬まで使ったのだと理解し、炭治郎は焦り、悔しさと羞恥に涙が出そうだった。

「身体に塗った液は浸透したか？」

「この媚薬は、濡れるとさらに効果が高まる。それをこれから証明してやろう」

周囲で闇がざわめくような気味の悪い笑い声が巻き起こったかと思うと、視界を塞がれた炭治郎の首筋に、柔らかく濡れた感触が走った。

「っ・・・!!」

しかしその次には胸、脇腹、両足、次々と濡れた感触が全身を襲う。

(なんだこれは？舌・・・?)

炭治郎が知覚した通り、自分の肌を這い回っているのは妖者たちの舌だった。どの舌も妖艶で巧みに動いて、炭治郎のさらに敏感になった肌を舐め回してくる。

首を上下に舐められ、耳をぬるぬると舐められ、鎖骨を添われて胸の桜色を固くした舌先で抉られ、腹は腹筋に沿ってヌルつく舌が這い回る。

生ぬるい舌で全身を舐められていると分かった時、嫌悪と共に間違いないため息がでそうな愉悦も感じてしまった。塗られた薬の効果だと炭治郎は思いたかった。

妖者の舌は耳、首筋、胸、腹筋、足の付け根、それだけではなく、炭治郎の自由の利かなくなった両足の指を執拗に舐め回し、指先まで包み込む。

(あ、足にまでっ・・・！)

ヒクヒクと痙攣する足の指は意外な性感帯で、その熱と気持ち悪さとゾクゾクする感覚に炭治郎は戸惑ってしまふ。こんな部分を舐めるなんてどうかしている、と思う反面、感じてしまっている自分にも恥じ入ってしまう。

一体妖者は何人いるのだろうか。自分の身体を這い回る舌の数を思うと、十人は下らない数に翻られていくことになる。視覚を遮断されている分、身体を這い回る舌の感覚を敏感に感じ取り、戸惑う炭治郎に無数の舌が容赦なく襲い掛かる。

「ふあっ・・・ああっ・・・！んんっ！んっ！んぐうっうっ！うあっ、はあ、はあ、も、もうやめ・・・だめだ、こんなっ・・・！んんんんんっ！」

最初は気が強かった炭治郎の声色にも艶めいた響きが入り、犯される体になってゆく。媚薬で性感を底上げされた部分を舐め回され、身体中に甘い痺れがあちこちで走って、何も考えることができない。

「実に円やかな肌だ・・・身体に傷跡がなければ、高く売れそうな小僧だと言うのに惜しい」

「薬の反応だけではないな。随分淫らになってしまっ、一週間辛かったろう」

濡れるとさらに効果を発揮する媚薬と言われただけあって、舐められたあとがジンジンと痺れて、もっと触れてほしい衝動に駆られてしまう。

背筋がゾクゾクして、炭治郎は何度も背を弓なりに反らせて、艶やかな息を吐き、妖者を愉しませる声を上げた。

「あああつ！も、もう、いい、だ、ろっ・・・うう、んんっ！あ、あああつ！」

耳を執拗に舐められ、頭の頂点から首の後ろにまで甘い痺れが止まらない。耳飾りがカラカラと音を立てるが、その日輪の耳飾りすら、妖者の穢れた唾液にまみれ、両耳を舐められる感触は、左右から脳を犯されているかのような錯覚を起こさせる。

「そういえばここの感覚はどうだ？仕置きをされたまま、敏感なままか？」

妖者が炭治郎の充血した桜色を柔らかい舌で舐めあげ、いいようなない快感が走る。体中への舌愛撫に、最も感じる部分のひとつである胸を責められては、声を我慢することもできない。

「ああっ・・・うっ・・・んん・・・っ」

そのまま口を付けられ、吸い上げながら硬くした舌先でグリグリと上下に扱かれると、一気に悦熱が高まって、炭治郎は望まぬ胸絶頂へと上り詰めさせられてしまう。

「んんっ！んんっ！あああああっ！」

快樂の終わりを迎え、荒い息を吐きながら力を失くした炭治郎を見て、妖者たちは嗤った。

「どうやらここもまだ敏感なままだな・・・しかし、これではまだぬるい。もっと責めて、衣服が擦れただけで極めるほどに高めてやろう」

そう言うと左右から針が突き付けられる。

妖者たちの雰囲気で異常を感じ、これからされるかもしれない仕打ちに、炭治郎から血の気が引いた。この特殊な針で刺されると、そこは否応なく性感帯になってしまい、自分では律できないほどの愉悦を感じてしまう器官に変じられてしまう。

「や、やめろっ！これ以上、俺の身体に、妙なことをするな！」

「お前に恨みはないが、お前の兄弟子の水柱に恨みがある。お前はその犠牲になってもらうだけだ。運が悪かったかと思うかもしれんが、この世にある天上の快樂をこの年齢で感じる事ができるぞ？」

「そんなもの、いらナイっ……！」

しかし二本の針が尖った炭治郎の胸の桜色に刺さり、痛みはないが、性感神経を直接触れられているような鋭い快感が襲ってくる。

胸がドクドクと高鳴り、桜色が痺れ、針を抜かれると我慢し難いほどの疼熱に犯される。

「はあ、ああ……っあああ……っ！」

もはや吐息を抑えることもできず、炭治郎は目隠しの下で曇りのなかつた瞳を潤ませて淫を織り交ぜ、轟動的な光を帯び始めた。

(む、胸がおかしい、何もされてないのに、感じる、ゾクゾクするっ……！)

触ってほしくてたまらない、などとは自分で決して思わず、口にしない。しかしそう言ったところで意地の悪い妖者たちが炭治郎の悲痛な哀願を叶えるとも思えないが、妖者たちはたちまち顔色を艶に染めた炭治郎の表情に食い入り、自らの仕掛けが上手く行ったことに快哉を上げる。

「さらに敏感になったここはどうだ？もう触れてほしくてたまらないか？ほれ、少し触れてやろう」

妖者の一人が左胸の突起に指をかけた瞬間、上半身に電流が走り、炭治郎の身体がガクガクと震える。

「あああああつ！」

軽く触れただけで快感の極みに近い愉悦を感じ、派手に叫び声を上げて炭治郎が乱れる。

「こちらも感じるか？」

触れられていなかったもう一方の突起にも指を掛けられ、再び衝撃と言ってよい快感が訪れ、炭治郎は胸を仰げ反らせて艶声を張り上げた。

「うああああああつ！」

しかも今度はすぐに指を離さず、しばらくその硬い感触を確かめるかのように円を描いてなぞり、さらに炭治郎を愉悦の奈落へ墮としてゆく。

「はあ、はあ、あああああつ！だ、だめ、んぐうううつ！」

若い肌が激しく痙攣したかと思うと、次の瞬間には、こときれたように体中を弛緩させ、敷布団の上に身体を投げ出した。はあはあと喘ぐ炭治郎の声が聞こえるので、意識はあるようだったが、相当の快楽を感じたらしく、しばらく動けないでいた。

「くく、少し触れただけでももう果てたか？だらしないなあ・・・」

（中略）

「筆はもう飽きただろう。次は違う遊びをしようか？」

妖者は一枚の札を取り出すと、その裏側にブツブツと経文を唱えて、左右に開かれた炭治郎の両足の間にある雛先に張り付ける。札は大きく、炭治郎の雛先どころか陰囊まで覆い隠し、即席の下履きができたようだ。

（こんなことをして、これから一体何を・・・）

それが自分にとってよくないことは、嗤う妖者の様子からしてわかる。炭治郎に札を貼り付けた妖者が再び口元を素早く動かして経文を唱えると、雛先に無数のぬるついた紐の感触を感じ、炭治郎は一瞬混乱した。

「あっ！な、なにつ・・・！」

下半身を見てみると、貼られた札から青く細い紐が数えきれないほど現れ、真下に張り付けられた炭治郎の雛先を覆い、その一本一本が縦横無尽に動き始めた。

「んぐううっ！あ、ああっああっ！」

性感神経の塊である雛先へ一斉に予測できない動きの紐が群がり、絡めとり、うねって、表面を容赦なく刺激し始める。

射精癖のついてしまった炭治郎はこの刺激ですぐに吐精するだろう、と思いきや、快樂の瞬間はいつまでたっても訪れない。

「ふあっ、ああ、あっ・・・な、なんだ、これっ・・・！」

青く蠢く細い紐も不気味だったが、これだけ一斉に性攻撃されても快樂を極めないのは、感じやすくなつた炭治郎では考えられないことだ。

「触手責めはどうだ？初めての感覚だろう」

「気分はどうだ？もう達しそうか？だが、まだまだだぞ？」

「くっ……気持ち、悪いっ……！」

最初こそ正体がわからず混乱したが、これも自分を貶めるための仕掛けだと理解し、炭治郎は強気で声を放った。

しかし札の裏の触手は雛先の裏筋や根元、くびれや鈴口を的確にくすぐり、果ては陰囊にまで伸びて好き放題に転がし、圧迫し始める。

(んんっ……これは少しきつい……)

妖者に舐め回されるのとは違う全方向からの一斉の責めに、炭治郎は奥歯を噛み締めて快楽に耐える。しかし無意識に快楽をさらに求めて、自分の細腰がカクカクと小刻みに動いていることは、把握していなかった。

「どうやらかなりの悦に晒されているようじゃな。淫らな感じようだ……」

「感じてなんか、いな、いっ……！」

「無理をするな。顔が紅いぞ、肌から汗が流れておるぞ、腰が動いておるぞ？」

妖者に指摘されて炭治郎は自らの腰の動きに意識を向けたが、その時には動きは治まっている。

(嘘をつ・・・！)

手酷い屈辱を感じて一瞬我を忘れたが、一方で札裏の触手がさらにざわめきを激しくさせ、快感源である雛先をめちやくちやに刺激して止まらなくなる。

「うあつ・・・！あつ、あ、ああああつ！」

快楽の限界まで来ていると言うのに、やはり吐精しない。強く締め付けられるどころか、腰が蕩けるほどの愉悦を感じ続けているのに、先走りすら出せないのはどういうことなのだろう。これが今、妖者が自分に仕掛けている淫責めか。

(相変わらず陰湿なことばかり・・・！)

炭治郎の胸が怒りで熱くなったが、下半身の愉悦ですぐに蕩かされてしまう。

ぬるぬると動く触手札は延々と雛先を甘美に刺激し続け、炭治郎の頭も快楽に浮かされて吐精することしか考えられなくなる。

細い触手が尿道へ侵入し、炭治郎の腰が痙攣する。

(んぐっ・・・そこはっ・・・!)

しかし炭治郎の憂慮も知らず、触手は二本、三本と侵入して、尿道を広げながら何本も侵入してくる。

「あぐっ・・・!あああっ!はあ、あっ・・・くううっ・・・!

奥を突かれれば絶頂と同等の快楽が巻き起こる尿道責めだが、細い糸の一つ一つが最奥をくすぐり、未知の快楽に炭治郎は腰を跳ねあがて激悦に耐える。

「うっ・・・うううっ・・・!」

極細触手が道の中に隙間なく入り、広げられる圧迫感と、最奥を弄られる止まらない快楽に炭治郎は無意識に腰を震わせていた。

この状態を長く続けられたら、どれほど辛いだろうかと嫌な事を考えてしまい、急いで弱気を打ち消すが、下半身から流れてくる愉悦は止まらなかった。

いますぐにでも札を引き剥がして達精を味わいたい衝動に駆られるが、両手両足は自由が利かない。

(い、いつまで続けるんだ・・・！)

妖者が小さく噛いながら近づき、札の上に湯飲み程度の液体を零すと、触手は一斉に動きを激しくして、炭治郎の雛先をさらに容赦なく責め苛んできた。

「っ、あ、あぁっあぁっ！あぐっ・・・！んん、んっ、ん、あぁぁっ！」

すでに三度は吐精しているだろう快楽を止められ、炭治郎が堪えられず艶声を上げる。

「まだまだだぞ、小僧・・・」

ぞっとする低い声で囁かれ、炭治郎の心が一瞬怯む。周囲で陽炎のような動きをさせながら、妖者たちは噛いながらその手を瑞々しい肌へと向ける。

「今度は手袋で遊んでやろう。この前もこれで大層悦んでいたな。やはり餓鬼は手袋遊びが好きなんだな」
数本の手が一斉に裸の炭治郎の身体に触れ、付着した精液を巻き込みながらその肌の上を滑ってゆく。

「くっ！つあ、あぐっ！んんんっ！ふあ、あっはあああ・・・っ！」

妖者たちはそれぞれの手に手袋をしていたが、当然それはただの手袋ではなく、内側に様々な感覚を弄ぶ仕掛けが張り付けられたおぞましい代物だった。

内側に獣の柔らかい柔毛を貼り付けて陶酔しそうな感覚を与えてくるものや、タワシのように硬い絨毛を生やした刺激の強いものがある。中には得体の知れないブヨブヨした感触のものもあり、濡れると動きが潤滑になって炭治郎の肌を滑らかに滑り、その肌を感じさせてくる。

炭治郎は兎のような毛並みを揃えた繊細な手袋が一番苦手で、それで触れられると頭が蕩けそうな情欲が湧き上がり、快楽の反応を抑えられなくなってしまう。

多種多様な効果を持った手袋が、精液まみれになった炭治郎の身体の上を這い回り、四肢に力がなくなつた若い肌を蹂躪してゆく。

「はあ、はあ・・・ああっ・・・さ、触るなっ・・・いやだ、んんんんっ！」

硬めの織毛を生やした指先で胸の突起を素早く摩擦され、一気に胸絶頂が迫って声を詰まらせてしまう。精液に濡れた顔を舐め回され、舌に精を乗せた口で接吻され、自らの精を無理矢理嚙下させられる屈辱を味わう。

決して飲む込みまいと拒絶するが、淫具を装着した手指で首元をくすぐられ、力が抜けて抵抗することができない。

「んんっ・・・ぐっ・・・こほっ・・・はぁ、はぁ、むぐっ・・・！」

精液まみれの口づけは何度も続けられ、そのたびに口腔を入り込んだ舌で性的に舐られ、口の中も熱くなってしまう。それは精液の生臭い臭いがかすれてしまうほど甘美で、これも妖者の技巧らしく、慣れた手管の前では、童貞同然の炭治郎では耐えられるはずはなかった。

「んっ・・・んん、んっ・・・！」

顔を舐められながらの口凌辱に、身体中を這い回る刺激に、身体が何度も愉悦で跳ね上がる。

過去、針で鋭敏にされた両胸を刷毛のように反発力がある手でしつこく舐られる。上下に素早く擦られ、円を描くように捏ね回され、触れるか触れないかの距離で焦らされ、胸での絶頂を何度も味わわされて、それだけで炭治郎は快樂でへとへとにされてしまう。

「んぐうううっ！んっ！あっ！ああああああっ……！」

数度目の胸の絶頂を迎えさせられ、緊張を解いた炭治郎の身体から、男心をくすぐる妖艶が漂う。触れれば面白いように反応する炭治郎の鋭敏な性感帯を徹底的に責め、妖者たちの凌辱は手心が一切加えられない。

胸だけでなく体中の性感帯、下腹や脇腹、体勢を変えられて背中や肩甲骨にも手袋をした手を這い回され、炭治郎は体中が蕩けると同時に、峻烈さを感じる愉悦に挟み撃ちにされて、すでに何も考えられない。

精液まみれの上半身をぴちぴちと撫で回され、自分の精の匂いで酔いそうだ。それ以上に、妖者たちから立ち込める血の臭いに身体の芯が疼きを止めてくれない。

（臭い、邪魔だ……）

しかし今の炭治郎の身体は、血の臭いがなくとも快樂の悶絶からは逃れられないほど追い詰められている。

兎の毛並みを持った手が札を貼られたままの炭治郎の雛先を札ごと握り締め、それだけで腰の奥が甘く痺れ、一緒に性感帯を責める触手もろとも撫で扱かれ、あれだけ吐精した雛先はその刺激に応え、硬くなる。精液のぬるつきを含んだ絨毛は滑りを増し、札越しに炭治郎へ頭が蕩ける愉悦を与えてくる。

「あっ・・・あ・・・ああ・・・っ」

「よほど気持ちよいのだな。淫らな顔をしておるぞ・・・好いか？好いか・・・？かわゆいのう」

廻るような妖者の声も遠くに聞こえる。上下に激しく摩擦されて、ぐちぐちと水音をさせながら、炭治郎はあっという間に腰の奥が甘美に痺れる吐精感を感じる。

「んんんっ！あっくうう・・・っ、ん、ふあああ・・・」

しかし触手札のせいでどんな刺激を受けても吐精できず、達したい思いばかりがやたらと募る。妖者はそんな炭治郎の煩悶する様子を見て淫猥な笑みを浮かべる。炭治郎は何も考えられず、身体中で感じるあらゆる愉悦の快楽に弄ばれ、身体を自由にくねらされてしまう。

「どうじゃ小僧、達したいか？吐精したいか？」

「ぐっ……ううっ……したくないっ……！」

すると炭治郎の言葉を汲み取ったかのように、札触手は動きを激しくして性感神経を掻き毟る。

「あああつ！や、やめ、これ外せっ……！あああつ！」

「まだまだ仕置きが必要なようじゃな」

ヌルつく手が敏感な背中を撫で回せば、快感は前面に伝播する。そこを見透かされて両胸の突起を刷毛のようにしっかりした感触を持った指で抓まれては、甘い嬌声をあげるしか逃げ道はない。

「あああああつ！あつうううっ！んんっ！あああああつ！」

身体中で絶頂を感じ、快楽に陶醉する炭治郎が美しい。日頃は日輪のような明るさと曇りなき眼を持った陽の少年が、狼藉者たちの手によって遊女裸足の色香を放って男の性欲を煽りまくる。

うっ伏せにさせられ、比較的傷の少ない綺麗な背中を晒される。これまでの度重なる絶頂責めで、背中からも無数の汗が噴き出していた。

妖者の術で四肢が動かない炭治郎は、胸から上は床に、足は膝を立てさせられて両の足首を縛られ、間に一尺ほどの長さの竹を挟まされる。猫が屈伸をするようなポーズで固定され、絶頂の途中で放り出された、体中の性感帯がひたすら疼く。

(も、もうこれ以上、何もしてくるな……)

狂おしいほどの身体の疼熱に耐え、妖艶な吐息を漏らす炭治郎に、妖者の手は容赦なく伸びてくる。突き出された魅惑的な臀部を通り過ぎ、タワシに匹敵する強度の手が雛先に迫る。

「んぎっ……!あああああっ!それ、やめっ……!」

度重なる吐精で弄り回され、風がそよいだだけで感じるほど敏感になってしまった雛先にとっては、これほどの強度がある淫具で責められるのは酷すぎる。

チクチクと鈍痛に似た快樂で雛先を包まれ、炭治郎の全身が電流を浴びたかのように痙攣しまくる。

「うぐっ……ああ!だ、だめ、今それはだめ、勘弁しっ……て……!んんんん——!」

しかし妖者の手は無情にも雛先を上下にゆっくりと摩擦し始めた。

「あああああつ！あつ！あああああつ！だめ、感じ・・・すぎって・・・て・・・」

辛い、と、炭治郎は言葉を紡いだが、被虐の身体にされてしまった炭治郎は、強すぎる刺激も激悦へと変換してしまう。

しかしいくら刺激されても触手札で絶頂を遮られ、気持ちいいのにとずっとそれ以上の状態が続いている。あまりの焦燥感と触手の苛んでくる快感に、炭治郎は狂乱しそうだった。

しかし普通の男が受ければ気を失いそうになってしまいう責めも、炭治郎の身体は愉悦として受け止めてしまふ。

ここまで炭治郎の身体を調育したのは外ならぬ妖者たちであり、今夜の妖者は、さらに手加減無用で炭治郎を責めようと快楽の輪を縮めてくる。

「良い声で鳴く・・・もつと可愛がつてやるぞ」

今度は妖者たちの標的にされる部分は決まっている。強力な擦り込みで意識が飛ぶ吐精感を強いられるのに、出せない辛さでぐったりとした炭治郎にも、妖者たちは欲望の手を止めない。

ずっと触れられずヒクヒクと痙攣しながら、淫液を流す秘孔に視線が集中する。

普段なら馴る言葉の一つも悪態を吐く妖者たちも、生唾を飲み込んで若く穢れない桃尻に欲情している。そしてとうとう、刷毛程度の強さの繊毛を取り付けた指が一本、その中へと侵入した。

「んぐうううううっ！ああ、止め、抜いて、あああああ！」

動かせない身体を必死に揺らし、身体中の産毛を総毛立たせる。魅惑的に反った背中が激しく痙攣し、首を振りたくって涙を飛ばし、その反応には今にも発狂しそうな危うさがあった。

「どうだ？水柱を呼ぶか？」

炭治郎を正気づかせる残酷な言葉を吐いて、それを聞かされた炭治郎は、ううう、と呻いて首を左右に振って、上半身から力を抜き、気を失ったかのように床にしな垂れかかった。

（腰が痺れてたまらない、熱・・・い・・・）

はーっ、はーっとな炭治郎の荒い息が静かな堂内の空気を震わせ、囲む妖者たちは風のように囁く。

「よしよし、可愛がってやるから、思う存分泣き喚け」

すると洞内に挿入されていた刷毛指が入口をぐるりと回転させ、炭治郎の身体を激しく痙攣させた。

「あぐあああああああっ！」

これまでとは色の違う快感を浴びせられ、艶声というよりも咆哮に近い声を上げ、背中を仰け反らせて炭治郎が叫んだ。

（中略）

「うっ……うっ……」

炭治郎の唇から力ない呻き声が零れ、腰をガクンと落すと、両足の間には縄を食い込ませたまま床に着き、そのまま横倒しに倒れた。

はっ、はっ、と力なく吐く息には覇気がなく、半分開かれた赤銅色の瞳からはすっかり光がなくなっていた。

「ほら起きろ、この程度で寝るな」

妖者が縄の両端を引っ張って食い込ませると、炭治郎の身体はビクビクと痙攣し、首を反らせて小さな声で艶声を上げた。

「ああ……っ」

それでも絶頂しているのか、下半身がビクビクと小さく跳ね上がっている。股縄で散々擦り立てられて快楽を極めることを強制された股座は、摩擦を潤滑にするために溢れ返るほどの粘質な淫液まみれになり、倒れた炭治郎の両足の間から、まるで女の愛液か潮のように妖艶で大量に垂れ零れている。

「ふふ、この責めも耐えたか・・・しかしもう一歩かのう」

ぬるりと股縄を引き抜き、その感覚にすら炭治郎は身体を跳ねさせて、快感を貪ってしまう。後ろ手に縛られた拘束を解かれても指一つ動かさず、ただ口から涎を垂らしながら、ふうふうと息を吐いて肩を呼吸で上下させている。

「わしはそろそろたまらんようになってきた・・・」

「わしもじゃ・・・この小僧の、なんと可愛いこと」

「もう、皆で犯してしまおう」

「それで堕ちなければ、あの仕置きをすればよい・・・」

倒れた炭治郎の周囲で欲に濡れた妖者たちの声が木霊する。
敷布団の上に引きずって転がすが、炭治郎は体力を使い果たしたように力なく手足を投げ出し、仰向けの状態で無防備に裸を晒してしまう。

秘孔に挿入されっぱなしになっていた淫具を引き抜かれ、炭治郎は継続絶頂からようやくやく解き放たれる。

「あああつ……」

身体を痙攣させ、淫欲に濡れた声で快楽を訴える。その声は日頃の炭治郎からは想像もできないほど艶に
まみれ、男心をそそらずにはいられない、妖しい喘ぎだった。

巨根の妖者に犯されて広がってしまった胎内は再び窄まっていたが、引き抜かれた淫具が恋しいかのよう
にそこをヒクつかせて、新たな刺激を欲して震えている。

「ふふ、可愛いのうち……」

妖者が炭治郎の円やかな臀部を鷲掴みにし、秘孔に舌を這わせて何度も快感を味わわせると、炭治郎はその
感覚であ、あ、と可愛らしい声で喘ぐ。

「我らが精々可愛がつてやる・・・言っておくが、狂うなら早く狂えよ・・・？でなければ、もっと苛烈な仕置きが待っておるぞ？」

「んんっ！あっ・・・はあ・・・っ！」

唇から零れる艶声からは、炭治郎の意思など全く汲み取れない。胸の桜色に爪を立てられ、一気に上がる絶頂感に上半身を震わせ、力のなくなった瞳から涙を流す。

「滑らかな肌触りだ。若いというのはいい。憎いのう・・・」

妖者に脇腹へ歯を立てられたが、それだけでも感じるらしく、炭治郎は身体を仰け反らせて顕著な反応を返す。

身体中、汗と精液にまみれてすでに凌辱の限りを尽くされた態にされてしまったが、妖者たちはまだ炭治郎を責めるのを止めようとしなない。

秘孔を舐めしやぶっていた妖者が動きを止めると、自らの剛直を取り出して、その快樂の源泉へと一気に突き挿れた。

「あああああつ……！あつ、あ、あぐつ……ううう……っ！」

挿入されただけで、下半身から脳髓にまで快楽の稲妻が走る。陶醉した艶声をあげ、淫猥に乱れる炭治郎を眼下に妖者は満足そうに腰を使い、炭治郎を貪り始める。

「あ、あ、あ、あ、あつ……ああつ……」

もうすでに快楽に堕ちたと思われる様子だが、妖者たちは責め手を緩めない。最後のトドメか、それとも未だに炭治郎に反抗の意思があり、それを砕かんとしているのだろうか。

妖者の手が伸びて雛先を掴まれるが、炭治郎は甲高い啼き声をあげて腰を跳ねさせた。

「んんっ……そこ、も、出ない……！」

「ふふ、しかし悦は感じるだろうか？」

「ああつあああつ！あああつ！ああつああああ！」

度重なる責めでおぞましい程鋭敏になった雛先を乱暴に扱かれ、炭治郎が涙を弾き飛ばしながら悶絶する。

「いいぞ、胎の締まりがよくなった」

「あああつ、あつああ——！！」

愉悅に声を上げる炭治郎には、すでに理性のかけらも感じられない。快楽に陶酔して沼に漬けられ、頭まで埋没し、その耽溺に浸っているようだった。

雛先を弄んでいた妖者がそのまま口に含み、根元から先端までを唇で扱きながら、中で舌を暴れさせて快感神経の塊を容赦なく愛撫する。

「んぐっ・・・んううううっ・・・！」

口の中の熱さと舌で表面を舐め回される快感に、炭治郎が快楽の呻き声をあげ、腰を痙攣させる。唾液をたっぷり乗せた舌でぬるぬると舐め回され、堪らない快感に炭治郎は口を開け放しにて、はあはあと荒い息を吐き、口の端から淫らな唾液を垂らしている。

その口に妖者が剛直を突き挿れて容赦なく炭治郎の口腔を犯す。

「んんっ！んぐうううっ！」

自由な呼吸を奪われ、苦しさに呻き声をあげる。炭治郎の後頭部を掴むと、前後に激しく揺らして肉棒を頬張らせながら、無理矢理口で奉仕をさせる。

「ふふ、尻も魔羅も口も気持ちいいだろう？ほらほら・・・」

そう言って炭治郎を犯している妖者が腰をさらに激しく使い、淫らな水音に紛れて炭治郎のくぐもった快樂の音が響く。

「んふううっ！んっ！ぐっ！んぐぐっ・・・！」

胎も責められ雛先も口淫され、下半身の両方の責めに耐えきれず、炭治郎はもう出ないと音を上げていた雛先から、一筋白液を吐き出した。

「んんんんん—————！」

吐悦の快樂で体中を痺れさせ、肌を緊張させるが、その力で口も胎も狭めてしまい、さらに妖者を悦ばせて、自分も強い悦を得ることになってしまう。

ビクビクと震える炭治郎の口から剛直が引き抜かれ、紅い唇と剛直の間に唾液の糸が繋がって儚く千切れた。

「はあ、はあ、はっ……んぐっ……んむううっ……！」

そして解放された唇に他の妖者の口が張り付き、そのまま炭治郎の口腔に舌を挿し入れるが、中にドロっとした液体が含まれていて、炭治郎は無理矢理自ら放った精を口腔に挿し入れられてしまう。生臭さと粘つきに嫌悪を感じたが、妖者が精液にまみれた舌で炭治郎の舌を吸い、絡め、上を向かせて精液を無理矢理嚥下させられる。

「んぐっ……んんっ……んふ、ん、んんっ……！」

こくこくと妖者の唾液と自らの精液が混じった淫液を飲み込まされ、普段ならば嫌悪で吐き気を催すところだが、精液の匂いと味に慣れてしまった今では、されるがままになっている。

「んぐっ……ふ……ふあ、あ、あむっ……んん……っ」

精液にまみれた舌でさらに喉の入り口や舌の表面、顎の上を舐め回され、ぞくぞくと脳天まで愉悦が走る。白液にまみれながら互いに舌を絡め合う様は倒錯的で、周囲の妖者たちが小さく嗤って噓し立てた。

「自らの精の味はどうだ？うまいか？」

「最初に比べたら大人しくなったものじゃな、もう堕ちたか？」

しかし、妖者が炭治郎の眼前に一本の紐を垂らし、一人の妖者が炭治郎の耳元に囁く。

「炭治郎」

その声は完全に義勇のもので、それを耳にした炭治郎は、一瞬瞳に力を取り戻した。

「ぎゅ……さ……」

「妹はどこにいるっ？」

「……」

炭治郎は歯を食いしばり、ただ黙った。

妖者はずっと炭治郎の妹の居場所を聞き続けているのだが、こと妹となると炭治郎は意思を取り戻し、頑なに進言を拒否する。

それが兄弟子の声であっても、炭治郎は口を割らない。

どうやら義勇の匂いも声真似も、妖者の罠だということだけは理解しているようだ。快楽に流されているように見えて、その瞬間だけは炭治郎らしく頑固な性格が表面に出る。

「ふふ、全くしぶとい小僧だ・・・さあ、胎に出してやる」

「あ、あ、だ、だめ、だ、中には、もうっ・・・！」

炭治郎を犯す妖者の腰が激しく前後し、一方的にガクガクと揺さぶられ、炭治郎は胎を穿たれる激感に女の子のような艶声をあげ、両足を痙攣させて先に果てる。しかし炭治郎が果てもかまわず、妖者は自分の欲のために華奢な腰を激しく揺さぶり続ける。

「あっ！あ、あ、はああ・・・あっ・・・っ———！」

（中略）

広げられた胎内で前立腺の部分を強烈に押され、一気に達悦感がせりあがってくる。炭治郎の声に構わずさらに腰を進められ、弱い性感帯を渾身で引つ掻かれて、炭治郎が深く極めるのは一瞬だった。

「あっあああっ！あああああっ！」

一度昇りつめるとそのまま降りられず、炭治郎は達した状態のままさらに奥へと渾身を迎え入れさせられる。

「んんっ、はあ、も、もう、ずっと・・・あああああっ！ま、まだ、ですかっ・・・！」

これでも義勇はゆっくりと挿入して手加減しているのだ。しかし炭治郎はすでに快楽を極め、手足を暴れさせて狂乱しかかっている。

（そんなに好いものなのか）

炭治郎が自分の身体でここまで悦んでいることに嬉しさを感じる一方、ここまで炭治郎の身体を仕上げた妖者たちに怪気も起こる。

しかし快楽に翻弄されて汗の珠を噴き出し、身体を悶えさせ、表情をくるくる変える様は存外そそる。

炭治郎が可愛い。可愛すぎて、自分以外の者には触れさせたくない。

義勇は湧き上がってくる感情が独占欲だと気づくことなく、さらに身体を深くまで進め、炭治郎の胎を穿つ。

一気に根元まで突き上げ、互いの腰がぶつかった瞬間、炭治郎の身体が大きく跳ね上がった。

「んぐっ！あっ！ああああああああっ！」

身体が疼熱を感じてからずつと抱いていた最奥に、ようやく刺激が加わった歓喜と、意識が飛ぶ喜悦に炭治郎の身体が大きく反応する。

義勇の渾身が身体之最奥を犯し、ずつと胎で達していたところへさらに高い悦が加わり、炭治郎は耐えられず義勇にしがみつく。

「——っは、ああっああああ……っ！」

自分より一回り小さい、痙攣する炭治郎の身体に抱き締められ、義勇はさらに愛おしきを感じる。なにより、炭治郎の胎に挿れた渾身が気持ちいい。炭治郎の呼吸に合わせて中が収縮し、ザラついた部分があるかと思うと、奥からとろとろと熱い液体の流動を感じる。動いていないのにこれほどの悦が得られるのなら、自分の思うままに動けばもつと好いのはわかっていたが、そこで自制が効くか逡巡していた。いや、自制などどづくにできていない。自分はもうすでに、炭治郎の許しもなく勝手に中へ突き立てたのだ。

自分にしがみついている炭治郎の顔を見ると、顔を真っ赤にさせて赫い瞳に涙を溜め、はっ、はっ、と短い息を吐いている。一見すると苦しそうだが、垂れた眉尻としがみついてくる加減された手の強さが悦を訴えている。

「炭治郎、動くから少し力を抜け」

耳元で囁くと、弾かれたように首を震わせ、んん、と甘い声をあげる。しゃべる呼吸だけで感じるらしく、義勇の渾身を迎え入れたせいで身体の性感が高まっているらしい。

「はあ、はあ、はい・・・」

炭治郎はそう答えたが、どうやって力を抜いたらいいのかわからない。胎の中はずっと達している状態で頭は妄と霞み、自分で自分の身体を律せない。

力を抜こうとして逆に力を込めてしまい、全身に涎が止まらないほどの快楽が走破する。

「あああつ！ふ、んっんうううっ！ふあああつ！ああああつ！」

義勇に申し訳ないと思いつつながら、自分で勝手に悦を貪ってしまう。胎の最奥にまで挿入された渾身が熱くて、疼き続けていた箇所、渾身に走る血管の脈動だけで好くなってしまう。

素肌よりも十数倍も敏感になっている胎は、それだけです。に快楽を極めてしまい、降りることがない。暴れだしてもおかしくないほどの愉悦を感じながら、炭治郎は義勇に世話はかけまいと必死に快楽に耐え、赤銅色の瞳から涙を零す。

「動くぞ」

義勇に吐息混じりの声で言われて、今の状態でも相当なのに、動かれたらもつと好くなってしまうと焦るものの、それを想像して身体はそれを欲しがって胎が蠢き、炭治郎に考える間も与えない。

「あ・・・あ、うあつ！ああああああつ！」

奥から入口まで一気に引き抜かれ、その感触に涎が滴るほどの喜びを感じてしまう。快樂が脳天を突き抜けて、魂が抜けてしまいそうなほどの凄悦だった。体中がガクガクと震え、なくなった渾身の跡を埋めるように胎が再び締まり、中で壁同士が擦れて、勝手に好くなってしまう。

「はあー、はあ、はあ、あああつ……！」

しかし先端はまだ挿れられたままだ。

入口は痙攣し、その動きが奥にまで伝播して、何もないのに炭治郎は感じて背中を仰け反らせてしまう。ようやく達した高みから降りられたと言うのに、再び先ほどの重厚な絶頂感が欲しくなって、胎の奥が切なく疼いていた。

「つ……うう、はあ、はあ……」

額と首筋を汗が伝い、炭治郎が全身で必死に義勇を貪っているのがよくわかる。一方の義勇は、まだ一度挿れて途中まで抜いただけだ。しかしたったそれだけでここまで感じている炭治郎を見下ろして、言葉にできないほどの劣情と支配欲がせりあがってくる。炭治郎をもっと気持ちよくさせたい、狂乱させたい、自分以外にこの姿を見せたくない。

(たまらない、炭治郎、好すぎるぞ)

義勇の背中にゾクゾクと獣欲が湧き上がり、雄の本能としてもっと快楽を貪り、炭治郎を啼かせたくなつた。

引き抜いた渾身を再び挿入し始めると、炭治郎の身体が再び激しく硬直する。肌を震わせながら、炭治郎が泣きそうな声で訴える。

「ぎゅ・・・さん！も、もうちょっと・・・ゆっくり・・・！」

「俺はこれでも、ゆっくりしているが・・・」

「ああっ！か、感じ・・・すぎてっ・・・！」

炭治郎の言葉を聞いて、義勇はその腰を掴むと、そのまま一気に渾身を胎内へと突き挿れた。

「あっ！かはっ・・・！あああああっ！」

義勇の渾身が炭治郎の最奥をいきなり突き、目の前に火花が散るほどの達悦が踏み込んでくる。

緩やかに挿れるだけで涙が流れてくるほど感じると言うのに、これほど性急に中を摩擦され、一気に奥まで穿たれ、あまりの衝撃に、一瞬炭治郎の意識は遠ざかった。

しかし義勇はすぐに抜く動作はせず、渾身を胎の中に挿入したままで炭治郎の反応を見ている。いや、愉しんでいると言い換えてもいいかもしれない。

「う……あ……はーっはーっ……」

全身を痙攣させながら首を仰げ反らせ、汗でそこに張り付いた赤銅色の髪の毛が艶めかしい。

渾身を抱えているだけで生じる快樂刺激が止まらず、炭治郎は何も考えることができずに、ただ快樂の強さを弱めるためだけに激しい呼吸を繰り返す。

（身体が疼くのに、せつかく義勇さんがしてくれてるのに……これ以上気持ちよくなりたくない、おかしくなる……）

おぞましいほど敏感になってしまった炭治郎は、すでに達悦を何度も迎えているが、義勇からすればまだ三回挿入しただけだ。それも、極めてゆっくり。当然、大人の男が満足できる回数ではない。いくら胎内がよかるうが。

可憐ともいえる愛らしい所作で顔を朱くし、快樂に乱れている様を見せつけられ、義勇は劣情を抑えられなくなる。

「ひっ、うあ、ああっ！ゆ、ゆっくり……っ！」

しかし炭治郎の懇願も聞き入れず、義勇は一気に渾身を引き抜いた。抜かれる激感に炭治郎の全身が痙攣し、足指が丸まって、背中がビリビリと痺れる。

「——っ！はあ、はあ、はっ……！あ、ああっああっ！」

炭治郎の呼吸が終わるのを待たず、義勇は腰を進め、再び一気に奥まで渾身を埋め込んだ。内臓を突き上げられ、最も強烈な快感源を打たれ、炭治郎は涙を流して激悦に震える。

「あっ……ああっ……！」

口が開けられたまま呼吸が止められず、目の前で火花が飛び散るのが止まらない。胎の奥に義勇の渾身が埋まり、さらに抉られるように腰を動かされ、意識が飛ぶほどの極悦が全身に走る。

「うあつあああああつ！んっ、ぐう、ああ、あああああつ！」

その間にも義勇は腰を引いて渾身を引き抜き、抜き出しの快感に意識をさらに飛ばした中、間髪入れずまた最奥まで一気に挿入される。

義勇の責めは普通の目合いとなんら変わることはない普遍的な動きだったが、受け手の炭治郎が感じやすすぎた。

一度の抽挿だけで何度も絶頂を迎える体たらくだというのに、それを連続で速く動かれば、快楽が渋滞して息をするのすら忘れてしまう。

義勇も腰を使って技巧を凝らすことはしない。しなくとも炭治郎の胎中は筆舌に尽くし難いほど好く、中に挿っているだけのため息が出るほどの快感を与えてくる。

その中を激しく摩擦すると、いいよのない激悦が訪れ、自然と腰の動きも止まらなくなった。

(炭治郎が可愛い)

「あつ、あつ、ああ、あつ、あつ、ああああつ、や、あ、もうっ、あああ・・・」

鼻にかかった女のような艶声が、聴いていてぞくぞくするほど欲情をそそる。昼間の炭治郎とは信じられないほど妖艶で愛らしく変貌した炭治郎は、極上の身体を持って雄を迎え入れ、想像以上の痴態と快楽をこちらに与えてくる。

※続きは製品版でお楽しみください